

〔論 文〕

中国文献に見える麝香について

—その香と薬の効用—

高 橋 庸 一 郎

一、麝字について

漢・許慎『説文解字』（以下『説文』と簡稱す）では、麝字は麝字でとっている。・𧇧は金・韓孝彦『四聲篇海』に、「𧇧、亦た𧇧に作る（𧇧亦作𧇧）」とし、この『篇海』の基礎となった梁・顧野王『玉篇』の、今残る残巻を集めた『原本玉篇残巻』（中華書局・一九八五年九月刊）には、𧇧字は無いが、日本・市岡正『大全文林玉篇』には、「𧇧は射に同じ（𧇧同射）」とする。また明・張自烈『正字通』には、「𧇧は射に同じ（𧇧同射）」とある。・𧇧は『説文』に、「弓弩は身より発して遠きに中る（𧇧、弓弩發於身而中於遠也）」とするが字解としては要領を得ない。射は今、身と寸に従うが、射字の構成素としての身と、本来の身字とはその成り立ちが同一ではない。身は『説文』に、「躬なり（躬、躬也）」とする。所謂互訓である。段玉裁が、「躬は身の偃むを謂うなり、脊骨に於て主とする

中国文献に見える麝香について

なり（躬謂身之偃主於脊骨也）」とするのは、『説文』の呂部に、「躬は身なり、躬、或は弓に従う（躬、身也、躬、躬或從弓）」とあるからであろう。康殷『文字源流淺説』は、「腹を袒ぎたる裸體の人の形の側視を象る、男體なり（象袒腹的裸體人形側視、是誇張胸體腹臍人形、晚金多作男形）」とする。白川靜『字統』は、「みごもっている人の側身形」とし、両者男女対象となっているのは興味深い。これに対して射字は𧇧字であり、康殷『古文字学新論』では、射を一字素から成る字とし、「手にて弓を引き矢を發するの狀を象る（象手引弓發矢之狀）」とする。『説文』は、麝字を麝字とするが、いずれにせよ射、𧇧は一字構成の中の音符である。

次に麝字の上部鹿かんむりであるが、『説文』は、「麝、獸なり、頭の角、四足の形を象る、鳥鹿は足相い似たり、七と尺に従う」

（獸也象頭角四足之形、鳥鹿足相似從七尺）

とする。段玉裁附注本は『韵會』によって、「鳥と鹿は足、相い比

べて、比に従う（鳥鹿足相比従比）」とし、更に静嘉堂蔵本『宋本説文解字』にある、「尺に従う（従尺）」をばぶく。尺は『説文』に、「十寸なり、人の手十分を卻きたる動脈を寸口とし、十寸を尺とす、尺は規槩の事を指尺する所以なり」

（十寸也人手卻十分動脈爲寸口十寸爲尺、尺所以指尺規槩事也）とある。段玉裁は、

「寸は十分也、禾部に曰く十髮を程とし、一程を分とし、十分を寸とす、又曰く、律の數は十二、十二禾は秒にして一分に當る、十分にして寸なるは、漢志に曰く、九十分は黄鐘の長なり、一を一分とし、十分は寸とし、十寸を尺とし、十尺を丈とし、十丈を引として五度審かなり」

（寸十分也、禾部曰十髮爲程、程爲分、十分爲寸、又曰律數十二、十二禾秒而當一分十分而寸、漢志曰九十分黄鐘之長、一爲一分、十分爲寸、十寸爲尺、十尺爲丈、十丈爲引而五度審矣）

また、

「指尺は當に指序に作るべし、聲の誤なり、指序は猶標目なり」（指尺當作指序、聲之誤也、指序猶標目也）

と注している。また『字統』は、「手の指の拇指と中指とを展げた形」としている。いずれの場合も鹿がこうした意味を持つ「尺」に従っているとは考えられない。故に陳昌治刻本などの、「尺に従う（従尺）」がばぶかれたテキストの方が穩当と考えられる。鳥は籀文では鳥で、鹿の七に当るものとはほぼ同形のものが一つその足として付いている。『説文』が、「鳥と鹿とは足相似たり（鳥鹿足相似）」

というのは、康殷も『文字源流淺説』に、「鹿の足がなぜ鳥の足と似ているなどと言えるのか（鹿足怎能与鳥足相似？）」というように疑問に思わざるを得ないが、兩字の籀文の下部が似ているというのであれば理解出来よう。鳥は足二本の爲七が一つ、鹿は四足の爲二つの七、即ち比に従うと言うことになる。

二、獸麝について

扱、『説文』は、「麝、は小麋の如し、臍に香有り、鹿と舂に従う（麝、如小麋臍有香、従鹿舂）」とする。麋は『説文』に、「麋、鹿の属なり、鹿に従う、米聲、麋は冬至に其の角を解く（麋、鹿属従鹿米聲冬至解其角）」とする。これについては『禮記・月令』に、仲冬の月に「麋の角解く（麋角解）」とあり、仲夏の月に「鹿の角解く（鹿角解）」とみえる、麋は一年でその角を落す鹿で、中国では極くありふれた鹿類であつたらしく、『山海經・北山經』に、「獸有り、其ノ狀鼠の如し、而して莧首麋身（有獸焉、其狀如鼠、而莧麋身）」とか、「獸有り、其ノ狀麋の如し（有獸焉、其狀如麋）」とかまた『東山經』にも、「獸有り、其ノ狀麋の如くして魚目、名づけて嬰胡と曰う（有獸焉、其狀如麋而魚目、名曰嬰胡）」というように、他の動物を説明するのによく引き合いに出されている。麝はその麋よりも小形の鹿である。『爾雅、釋獸』に、「麝父ハ麋足ナリ（麝父麋足）」とあり、郭璞は注して、「脚は麋に似て香有り（脚似麋有香）」としている。麋は『説文』には麋で取り、「麋、麋なり、

鹿と困の省に從いて聲なり(麋、麋也從鹿困省聲、麋、籀文は省せず(麋、籀文不省)とす。麝について『釋名』は、「麝、小鹿の如し、香有り(麝如小鹿有香)とす。また『山海經・西山經』の、「其ノ陰、旄牛、麝、麝多し(其陰多旄牛麝麝)」に對する郭璞の注は、「麝は獐に似て小、香有り(麝似獐而小有香)」とある。『説文』は、「麝、麋の屬、鹿に從いて、章聲」とするから、獐は恐らく麋のことであつて、それは郭璞の説く所からすると、ほぼ麋と同じ属であり、又それは『説文』によつて麋とほぼ同じ種に属するものであるということになる。現に『本草綱目』で李時珍は獐と麋とは同じものとして扱ひ、更に麋とも同じとしている。そして唐の孟詵の注を引用し、

「肉は麋の肉と同じ、酒を醸すに良い、道家は其の肉を以て星辰を供養す、名づけて白脯とす、十二辰には屬さず、腥膩ではなく、禁忌は無きなりと云う」

(肉同麋肉醱酒、良、道家以其肉供養星辰、名爲白脯、云不屬十二辰、不是腥膩、無禁忌也)

と説明し、更に時珍は、「獐は胆白く性は怯、水を飲むに影を見れば輒ち奔る、道書には獐鹿は魂無きと謂うなり(獐胆白性怯、飲水見影輒奔、道書謂獐鹿無魂也)」と述べているがこれは段成式『酉陽雜俎續集卷八』の「公又道書中に説きて麋鹿は魂無き故に食するは可なりと言ふ」(公又説道書中言麋鹿無魂故可食)によるのである。この『本草綱目』は麝について、「其の形は獐に似たり、故に俗に香獐と呼ぶ(其形似獐、故俗呼香獐)」としている。また『周禮・考工記』の、

中国文献に見える麝香について

「天時變火以圍、山以章、水以龍」の鄭玄注に、「章は讀みて獐と爲し、獐は山の物なり、衣に在りては、齊人麋を謂いて獐とす(章讀爲獐、獐山物、在衣齊人謂麋爲獐)」という。また晋・崔豹『古今注』に、「麋は牙有りて噬む能はず、鹿に角有りて觸く能はず、麋は一名麋、青州の人は麋を謂いて麋とす(麋有牙不能噬、鹿有角不能觸、麋一名麋、青州人謂麋爲麋)」とある。

つまり麝は、麋、麋、麋とよばれる鹿と殆んど同じ類の鹿で、それ等と異なる点は、麝が少し小型である点と、香を有しているという点である。『説文』の、「臍に香有り(臍有香)」については、宋・黄鑑の『楊文公談苑』に、

「商の汝山中、麝多し、其の臍を絶愛す、人に逐われ急すれば即ち岩に投じ、爪を擧げて其の香を剝裂すれども就ち繫して猶四足を拱して其の臍を保つ」

(商汝山中多麝、絶愛其臍、爲人遂急即投岩、擧爪剝裂其香、就繫猶拱四足保其臍)

とある。また唐・段成式『酉陽雜俎』にも、

「水麝臍中、皆水漉る、一滴を一斗の水中に用いれば、衣物を漉ぐも其の香歇まず」

(水麝臍中皆水漉、一滴於斗水中用、灑衣物、其香不歇)

とある。また宋・林逋の『梅花詩』に、「小園の烟景は正に凄迷たり、陣陣たる寒香は麝臍を壓す(小園烟景正凄迷、陣陣寒香壓臍)」の句がある。また李時珍は『本草綱目』の中で麝香のことを麝臍香と呼んでいる。つまり麝臍は麝香の分泌する所であるが、ま

た麝香そのものの別名でもある。

鹿部の字には他に麝字があり、『説文』には無いが、明・梅膺祚『字彙』に、「麝は麝麝なり、獸臍なり、俗字（麝、麝麝、獸臍、俗字）」とあり、『正字通』にも麝字の説解として、「麝は俗の香字なり、麝香に因りて別に麝を作る、誤なり、香は即ち麝臍の出す所なり（麝、俗香字、因麝香別作麝、誤、香即所出麝臍也）」とある。

この麝に本当に臍なるものがあるかどうか定かでないが、亮阿闍梨兼意の『香要抄』には挿図があり、角のない小鹿様の動物が丹念に描かれている。そしてその麝の下腹部には、明かに香が発せられる臍として描かれたと思われる円形の巻紋がはっきりと書き込まれている。因みに『本草綱目』にも麝の挿図が附されているが、これには臍と覚しきものはえがかれておらず、その絵は頸部が長く、頭部は異形で全体として稚拙である。また寺島良安の『和漢三才圖會』にある挿図は、『本草』で言えば猫類に当るもののように鹿類とは全くかけ離れたものがえがかれている。例えば頭部はまるく、口を挟んで上下にそれぞれ鬚鬚をつけ、胴には虎様のしま紋様が入り、尾は太く長いと言った具合である。この図にはそのもととなったものがあるはずであるが、その由来に興味が感じられる。また『政和證類本草』に附された麝は、角がなく、全体に鹿類のそれらしくは描かれてはいるが、細い点や特徴などは判然としない。しかし以上述べて来た挿図で共通する特徴は、いずれも角がなく、鬚鬚らしきものがあり、上顎に牙状のものがあるという点であろう。これ等三点が麝と他の鹿類と外見上の相違を示す最も大きな特徴とい

えるのであろう。

三、六朝以前の麝についての記述

麝について触れた最も古い文献は、前掲『爾雅』の、「麝父は麝足なり」を除いては、恐らく『山海經』ではなからうか、前に挙げた例文の外に『中山經』に、「陽帝の山、美銅多く、其の木は樞、杻、槩、楮多く、其の獸は麝麝多し（陽帝之山、多美銅、其木多樞杻槩楮、其獸多麝麝）」ともある。『山海經』に書かれた動物は荒唐無稽なものが多いから、これ等の文に見える麝が、果して本当に後の所謂麝香を取る鹿類の麝を意味しているかどうかは疑問である。更に『山海經』での麝は、その臍や香に触れられることが全くない。それはやはりこの場合の麝と言われているものが、後の麝香ジカではないということなのか、或は『山海經』の撰述者が、麝の香というものを全く知らなかったのかどちらかであろう。時代的には撰述者が香の知識を得るには少し早や過ぎたと見る方が妥当であろうか。

『後漢書・南蠻西南夷列傳』に、宣帝時代の蜀郡の冉駹夷について記した箇所があり、そこに、

「靈羊有り、毒を療す可し、又藥鹿を食す有り、鹿麝にして胎有る者は、其の腸中の糞、亦た毒疾を療す、又五角の羊、麝香、輕毛毳鷄、牲牲有り、其の人能く旄氈、班罽、青頰、髦毼、羊羖の屬を作る。特に雜藥多し」

(有靈羊、可療毒、又有食藥鹿、鹿麋有胎者、其腸中糞亦療毒疾、又有五角羊、麝香、輕毛毚雞、牲牲、其人能作旄氈、班鬪、青頓、毫氈、羊羗之屬、特多雜藥)

とある。前後の療毒、藥鹿、療毒疾、雜藥といった語句から見て、この麝香は明かに薬用としての産物に違いない。この時代に麝香の薬としての効用が認識されていたということは特筆すべき事であるにちがいない。しかしこの部分の記述は飽くまで、西南夷の俗として書かれており、ということは寧ろ当時漢民族にはこうした習俗は入っておらず、よって麝香の薬用効果もまだ認識されていないという事を裏から証明するものでもあろう。漢・劉歆の『西京雜記』に成帝の后妃となった趙飛鸞の話があり、そこに、

「趙飛鸞、皇后と爲り、其の女弟は昭陽殿に在りて飛鸞に書を遺りて曰く、今日の嘉き辰、賢姉、洪冊を懋め膺けらる。謹みて三十五條を上り禋りて、以て踊躍の心を陳べん」

(趙飛鸞爲皇后、女弟在昭陽殿、還飛鸞書曰、今日嘉辰、賢姉懋膺洪冊、謹上禋三十五條、以陳踊躍の心)

とあり、その三十五條の中に、金博山香爐、青木香、沈水香、香螺卮、九真雄麝香などの名が見える。しかし前漢成帝の時代(武帝より四代後)に已に、青木香、沈水香、麝香などが実際に香爐で焼かれていたとはどうも考えられない。これ等の香の名称は馬王堆出土医帛書や、武威出土漢代医簡にも見えないから、香としてのみならず、薬用としてもまだ用いられていなかったものと想像されるし、それに中国に於ける焼香の風俗の定着と確立はどうみても仏教の伝

中国文献に見える麝香について

来以後と考えられるからである。勿論だからと言ってそれ以前には全く無かったというわけではないだろうが、香の名称などがそれ程判然と確定されていたとは些か考えにくいのである。『西京雜記』は晋の葛洪の撰とも、梁の吳均の依託ともいわれるように、この辺りの記述にはやはり六朝期以後の匂いを感じないわけにはいかない。因みに九真雄麝香というのは、九真山で獲れた雄の麝香ジカからとった香ということであろう。九真山は湖北省漢陽縣の西南で、九つの峯に九人の仙女がいたといわれている山である。また麝の生息している所については、文献として他に『太平御覽・香部』所収の『嵩高山記』に、

「人有り、嶺上に在りて、異聲にして清、和、雅、妙なると聞き尋ねて復た得ず、唯だ一麝香、嶺上に在るを見るのみ、側足靈跳して忽ち在る所を失う」

(有人在嶺上聞異聲清和雅妙、尋不復聞、唯見一麝香在嶺上側、足靈跳忽失所在)

とある。麝の声の清、和、雅、妙というのは、その香の持つ特質をそのまま声の特質としてとっているであろう。嵩高山とは高山のこと、河南省登封縣の北にある名山で五岳の一つである。また『荊州圖記』にも、「臨澧縣の南に龍寄山有りて獸有り、麝多し(臨澧縣南有龍寄山有獸多麝)」とある。龍寄山というのはよく知られないが、九真山・嵩山ともに仙人伝説を持つぐらゐの山であるから可成り高く険しい山であろう。麝は山岳・高山に生息するものであるらしい。

五

四、靈葉としての麝香

麝香が非常に高価なものとされていたことは、『太平御覧・香部』所収の「南夷志」に、

「南詔に婆羅門、波斯蘭、婆渤泥、崑崙數種有り、外道交易の處なり、珠珍寶多く、黄金、麝香を以て貴貨とす」

（南詔有婆羅門、波斯蘭、婆渤泥、崑崙數種、外道交易之處、多珠珍寶、以黄金麝香爲貴貨）

とあるのを見れば解る。また外国貿易としても盛んに取り引きされていたということであろう。『唐書』には、「波斯國の人は皆、麝香を以て蘇の如く、鬚に塗し、額に點じ、及び耳鼻に用いて以て敬とす（波斯國人皆以麝香如蘇塗鬚點額及於耳鼻用以爲敬）」とあるから、ペルシャ人達の用途は漢民族と少し異っていたようである。

『齊書』に、

「東昏侯は金に蓮花を鑿して、地に帖し、潘妃をして其の上を行かしめ、此に歩するは蓮花に歩するなりと曰う、地に塗るは皆麝香を以てす」

（東昏侯鑿金蓮花帳地令潘妃行其上曰此步步蓮花也塗地皆以麝香）

とあるが、如何せん麝香は高価なものであったから、いつもこうした豪華な使い方が出来た訳ではない。

前にも述べた如く、この六朝時代は神仙道家の思想が大いにもて

はやされていた。香類は、そうした時代を反映して、神仙実現への靈藥として重宝がられていたのである。晋・陶淵明の『續搜神記』に、

「桓哲、字は明期、豫章に居りし時、梅玄龍、太守となり、已に病む、哲往きて之を省て梅に語りて曰く、吾れ昨夜忽ち夢る、卒となりて卿の來りて太山府君と作るを迎うと、梅之を聞きて愕然として曰く、吾れ亦た夢に、卿の卒となりて、衣を着し、來りて我を迎うを見る。數日復た同じく夢みること先の如くして、二十八日に當に拜すべしと云う、二十七日日に至りて脯したる後、桓忽ち惡に中りて腹脹滿す、人を遣して梅に麝香丸を索めしむ、梅聞きて便ち凶具を作らしむ、桓便ち亡す、八日にして梅卒す」

（桓哲字明期、居豫章時、梅玄龍爲太守已病、哲往省之語梅曰、吾昨夜忽夢作卒迎卿來作太山府君、梅聞之愕然曰、吾亦夢見卿爲卒着衣來迎我、數日復同夢如先、云二十八日當拜、至二十七日脯後、桓忽中惡、腹脹滿、遣人就梅索麝香丸、梅聞便今作凶具、桓便亡、八日而梅卒）

という話がある。この場合、桓が麝香丸を求めた理由は、それを飲むことによって病氣を癒さんとした爲か、或は麝香を服して尸解仙たらんとしたものか定かではないが、いずれにしても、麝香の靈藥としての効果を強く期待してのことであったことは確かである。また晋・葛洪の『抱朴子・内篇十七』に、人が山へ行った時、蛇を辟ける法が書かれており、その後半部分に、

「或は乾姜附子を以て、之を肘後に帶び、或は牛羊鹿の角を焼き

て身に薫じ、或は王方平雄黄丸を帯び、或は猪耳中の垢、及び麝香丸を以て足の爪甲中に著すれば、皆効有るなり、又麝香及び野猪は、皆蛇を啖う故に、以て之を厭うなり」

(或以乾姜附子、帶之肘後、或燒牛羊鹿角薰身、或帶王方平雄黄丸、或以猪耳中垢、及麝香丸著足爪甲中皆有効也、又麝香及野猪皆啖蛇、故以厭之也)

というのであるが、麝香ジカや野猪(イノシシ)が蛇を啖うというのはどうも信じがたい。しかし『抱朴子』は元来、荒唐無稽な話が多いからこの点のみをあげつらって怪しむは足らない。同じく『抱朴子・内篇十七』に、

「又沙虱有り、水陸皆其の新雨の後、及び晨暮の前に有りて、跋渉すれば必ず人に著く、唯だ烈日草燥の時は差稀なるのみ、其の大なること毛髮の端の如く、初め人に著けば便ち其の皮の裏に入り、其の在る所は芒刺の状の如し、小犯なるも大いに痛く、針を以て挑みて之を取る可し、正に赤きこと丹の如く、爪上に著きて行き動くなり、若し之を挑らざれば、蟲鑽して骨に至り、便ち、周く行き走りて身に入り、射工と相似て、皆人を斃す、人此の蟲有るの地を行かば、毎に住む所に還りて輒ち當に火灸を以て療し、身に遍くさせしめば即ち、此の蟲地に墮つるなり、若し八物、麝香丸、及び度世丸、護命丸、及び玉壺丸、犀角丸、及び七星丸、及び薺萐を帯びれば皆沙虱、短狐を辟くるなり、若し卒に此の諸薬を得ること能はざれば、但好生麝香を帯びるも亦た佳し雄黄、大蒜等を以て分けて擣いて、一丸の鶏子大なるものを帯び

中国文献に見える麝香について

るも亦た善し、若し已に中たる所と爲る者は、此の薬を以て瘡に塗れば亦た愈ゆ」

(又有沙虱、水陸皆有其新雨後、及晨暮前跋涉必著人、唯烈日草燥時差稀耳、其大如毛髮之端、初著人便入其皮裏、其所在如芒刺之状、小犯大痛可以針挑取之、正赤如丹著爪上行動也、若不挑之蟲鑽至骨、便周行走入身、其與射工相似皆斃人、人行有此蟲之地、每還所住輒當以火灸燎令遍身、則此蟲墮地也、若帶八物麝香丸、及度世丸、及護命丸、及玉壺丸、犀角丸、及七星丸、及薺萐皆辟沙虱短狐也、若卒不能得此諸藥者、但可帶好生麝香、亦佳以雄黄大蒜等分合擣帶一丸如鶏子大者亦善、若已爲所中者、可以此藥瘡塗亦愈)

とある。少々引用が長くなったが、麝香の使われる状況がよく解ると思われる。この中で言われている麝香丸や好生麝香がどういう根拠に依って沙虱や短狐(人間に害を与える虫の名)を避けることができるのか全く明らかでない。また「帯びる」というのはただ携行するだけであろうかと思われるが、それが何等かの力を發揮するとすれば、それはやはりその香に神秘な力があると信じられていたからであろう。つまり『抱朴子』に出て来る麝香、及びその他の薬様の物品は、内服用或は外塗布用の薬剤としても若干は用いられてはいるが、殆んどは、それを身に帯びることによって薬効が現われる、謂はば靈薬としての用法が眼目であるとともに、香の場合はその香が焼かれるのではなく、そのままに発せられる香そのものが重んじられていた点に注意すべきであろう。それは神仙的養生思想をその原

動力として起った本草薬術学がまだ神仙思想から独立し得ず、神仙思想の極く一部として讒かにその存在を主張しているに過ぎないという当時の実情をそのままあらわしているのである。しかしこうした情況は、後になって宋、元、明、清と時代が推移するに随って、前記二つのものが全くその立場を逆転させ、本草薬術学の極く一部の片隅に、香薬の神仙的な効果が存在するに過ぎなくなるのでありまた一方で焼香の風だけが独立して、単なる優雅、風雅の趣味としてのみ行われるようになるのである。

五、麝香と六朝・唐の文学

香は焼くものという考えが一般に認識され定着するのは六朝期仏教以後である。よって麝香が焼かれるものとして文学作品に出て来るのも六朝期以後であり、又逆に、六朝期以後の文学作品に出て来る麝香の殆んどは焼かれた香であって、焼かない生のもは、優雅、風雅とは無縁の本草的薬剂にその席を譲ったのであるといえるであろう。

梁・昭明太子の「銅博山香鑪賦」に、

「時に青女寒を司り (于時青女司寒)

紅光は鬢景として 紅光鬢景

圓舒の東岳に吐き 吐圓舒於東岳

丹曦を西嶺に匿す 匿丹曦於西嶺

翠帳は已に低く 翠帳已低

蘭膏は未だ屏せず 蘭膏未屏

松柏を爨くの火 爨松柏の火

蘭麝を焚くの芳 焚蘭麝之芳

熒熒として内に曜やき 熒熒内曜

芬芳として外に揚り 芬芳外揚

慶雲の呈色に似て 似慶雲之呈色

景星の舒光の如し 如景星之舒光

とある。博山香鑪とは深山幽谷の複雑に交錯した地形をあしらった有名な意匠の香鑪のことである。この賦では焼かれているのは蘭香であり麝香である。美しく精巧に作られた山岳溪谷を縫って香烟が芬芳と立ち昇る。作者はそんな自然の雛形の一角に、仙人に見たてた自分を端坐させてみたりしたのである。また陳・傅綽の「博山香鑪賦」には、

「器は南山に象り (器象南山)

香は西國より傳わる 香傳西國

丁諛巧みに鑄し 丁諛巧鑄

兼資匠みに刻す 兼資匠刻

麝火は朱を埋め 麝火埋朱

蘭煙は黒を毀つ 蘭煙毀黒

結構は危峯にして 結構危峯

横羅は雜樹なり 横羅雜樹

寒夜は暖を含み 寒夜含暖

清宵は霧を吐く 清宵吐霧

とある。これも前の賦と非常によく似たモチーフに基いている。丁
諤・兼資は当時の有名な香鑪制作者達の名である。ここでも勿論麝
香は赤い火を伴って鑪中で焼かれているのである。風流趣味人の粹
極まった感が、引用最後の二句に滲み出している。

また唐人小説の一つで、唐土本国では早くに亡佚し、日本にのみ
伝えられて来た張文成の『遊仙窟』には、(江戸初期無刊記本の古
訓(カタカナ)をそのまま記す)

「即ち桂心ヲ遣シテ通ヨハシム、暫ク五嫂ヲ參屈セシム、十娘少
府ト共ニ語話トモノカタリス、須臾之間ニ、五嫂則ち至リス、羅
綺ノウスモノ續紛トマカイテ、丹青ノイロ暉暉トテレリ、裙前ニ
麝散シ、龍盤、珠ノ繩、翠衫ニ絡、金ノ薄丹履ニ塗」

(則遣桂心通、暫參屈五嫂、十娘共少府語話、須臾之間、五嫂則
至、羅綺續紛、丹青暉暉、裙前麝散、龍盤、珠繩絡翠衫、金薄塗
丹履)

とある。これは着物の内に麝香を焚きこめているのである。それは
ここが神仙の窟宅であり、そこに住む十娘、五嫂達が仙女であるこ
とを、麝香の匂いで暗に示しているのである。

晋、陶淵明『雜詩・其十』にも、

「閑居して蕩志に執わる

時に駛りて稽う可からず

役に驅して停り息む無し

軒裳は東崖に逝く

沉陰たること薰麝に擬せば

中国文献に見える麝香について

(閑居執蕩志

時駛不可稽

驅役無停息

軒裳逝東崖

沉陰擬薰麝

寒氣は我が懐いを激しうす

歳月常に御する有り

我來りて己が彌に淹れば

慷慨の憶い綢繆たり

此の情久しくして己に離れ

在再として十載を經る

暫く羈する所の人と爲り

庭宇の翳木に餘り

倏忽として日月虧く」

寒氣激我懷

歳月有常御

我來淹已彌

慷慨憶綢繆

此情久已離

在再經十載

暫爲人所羈

庭宇翳餘木

倏忽日月虧(

とある。薰麝が沉陰とするというのは、薰陸香、麝香が裳にたき込
められ、それが沉陰としてわだかまることを言っているのである。
うっちゃって来た役人生活の過美と煩瑣を憶い、その比喩として用
いられている。

また沈佺期の『古歌』の詩には、

「燕姫の綵帳芙蓉の色

秦女の金鑪蘭麝の香」

とある。秦女とは左延年の作った樂府『秦女休行』の女休のこと
であろうか。宋の為に讎を報じたというその美しい強さを模様として

あしらった香鑪なのであろう。

また駱賓王の『禪歌行』に、

「月を寫せば黄を圖くこと罷み

波を凌いで翠を拾いて通ず

鏡花菱を揺ぐ日

鏡花菱を揺ぐ日

(燕姫綵帳芙蓉色

秦女金鑪蘭麝香)

(寫月圖黃罷

凌波拾翠通

鏡花揺菱日

九

麝を衣きて荷風に入る

衣麝入荷風

葉は落ち舟蕩れ難く

葉落舟難蕩

蓮は疎にして浦は空なり易く

蓮疎浦易空

鳳媒羞として自ら託し

鳳媒羞自託

鴛翼恨みて窮め難し

鴛翼恨難窮

秋帳の燈光は翠にして

秋帳燈光翠

倡樓の粉色は紅なり

倡樓粉色紅

相思に別れの曲無く

相思無別曲

併に棹歌の中に在り」

併在棹歌中」

とある。この「衣麝」も麝香を焚き込んだ衣を着て、ということである。

王維の「戲題輞川別業」の詩、

「柳條地を拂いて須く折れず

(柳條拂地不須折

松樹雲を披いて從に更に長ず

松樹披雲從更長

藤花暗かに猿子を藏せんとす

藤花欲暗藏猿子

柏葉齋を初めて麝香を養う」

柏葉初齋養麝香」

は全体としてはあまり意味のない詩であるが結句は嵇康の「養生論」の、「虱は頭に處して黒く、麝は柏を食して香はし(虱處頭而黒、麝食柏而香)」に由来するものであろう。王維の詩には焼香、焚香、を扱ったものが多い。

劉禹錫の「魏宮詩二首」の一首に、

「爐を添えて衣に麝を蒸薫せんと欲すれど憶い分明なるを得て燒するに忍びず」

(添爐欲蒸薫衣麝、憶得分時不忍燒)

とある。これも衣に麝香を熏せんとするの様をあらわしている。

最後に温庭筠の「達摩支曲」を掲げておこう。

「麝を擣ちて塵香と成せば滅せず

(擣麝成塵香不滅

蓮を拗して寸絲を作れば絶え難し

拗蓮作寸絲難絶

紅涙の文姫洛水の春

紅淚文姬洛水春

白頭の蘇武天山の雪

白頭蘇武天山雪

君見ずや愁い無く高緯の花漫漫たるを

君不見無愁高緯花漫漫

漳浦の宴は餘て清露寒し

漳浦宴餘清露寒

一旦臣僚囚虜と共にす

一旦臣僚共囚虜

羌管を吹かんと欲して先づ洩瀾たり

欲吹羌管先洩瀾

舊臣の頭鬢霜華早く

舊臣頭鬢霜華早

惜しむ可し雄心の醉中に老いたるを

可惜雄心醉中老

萬古の春は歸れども夢は歸えらず

萬古春歸夢不歸

鄭城の風雨は天草に連らなる」

鄭城風雨連天草」

以上挙げて来た詩に出て来る麝香は、すべて焼香、焚香、熏香の類である。尤も「達摩支曲」の麝は些か判然としないが、「擣して塵香とする」というのはやはり細かく砕いて香爐に入れるのである。これが唐代文人達の遊びとしての香である。詩人達は香爐から立ち昇る香烟を見、芳香を聞きながら大いにその想像力をかきたてられ、詩情の満ち足りた世界にひたることが出来たであろう。この「聞香」は以後ますます一般化していき、やがて宋代には一つの全く独立した趣味の分野として成立することになるのである。

六、臨床薬としての麝香

「抱朴子」に於て使われている麝香は薬としての役割を持っているには違いないが、それは麝香が本質的に持っている所の、患症部位に対する治療能力とは殆んど関係がないか、或はそれを大きくくわまわる超大な能力が要求されているものと思われる。その場合麝香に、臨床医薬ではなく、霊薬と呼ばれるのが最も適当であろう。

霊薬は以後かなり後の時代にまでその効果が期待され残っていくのであるが、しかし一方で六朝隋唐の代頃から、徐々にであるが臨床的、或いは対症的な現実的な医薬として科学的に認識された効力が期待されるようになるのである。それを最もよく表わしているのは何と言っても本草学の発展であろう。「重修政和證類本草」の第十六卷を見ると麝香についての記述があり、それには「神農本草」からの収録がある。

「麝香、味は辛にして温、毒無し、主に悪氣を辟け、鬼精物を殺し、温瘡、蠱毒、痢瘡など三蟲を去り、諸の凶邪、鬼氣、中惡、心腹暴痛、脹急痞滿、風毒、婦人の産難墮胎を療し、面黧、目中膚翳を去り、久しく服せば邪を除い、寤めて夢みず、寐て醒れず、神仙に通ず」

(麝香味辛温、無毒、主辟惡氣、殺鬼精物、温瘡、蠱毒、痢瘡、去三蟲、療諸凶邪、鬼氣、中惡、心腹暴痛、脹急痞滿、風毒、婦人産難墮胎、去面黧、目中膚翳、久服除邪、不夢寤驚寐、通神)

中国文献に見える麝香について

仙)

とある。また陶弘景を引いて、

「麝の形は麝に似て、常に栢葉を食し、又蛇を噉う、五月香を得るに往往蛇の皮、骨有り、故に麝香は蛇毒を療す」

(麝形似麝、常食栢葉、又噉蛇、五月得香往往有蛇皮骨、故麝香療蛇毒)

とする。これは前掲康祐「養生論」、渴洪「抱朴子」に依った記述であろう。また「日華子」に云うとして、

「邪氣を辟け、鬼、毒蠱の氣、瘧疾を殺し、墮胎を催生し、臟腑の蟲を殺し、蛇、蠶咬、沙蟲、溪瘴の毒、吐風痰を治し、子宮を内め、水臈を暖め、冷を止め疾を療す」

(辟邪氣、殺鬼、毒蠱氣、瘧疾、催生墮胎、殺臟腑蟲、治蛇、蠶咬、沙蟲溪瘴毒、吐風痰、内子宮、暖臈水、止冷瘧疾)

とする。李時珍は「本草綱目」で他本により「日華子」を補い、

「熱水にて一粒を研服すれば、小兒の驚客忪を治し、心鎮し、神を安んぜしめ、小便の利なるを止む、又能く一切の痛瘡膿水を触せしむ」

(熱水研服一粒、治小兒驚客忪、鎮心安神、止小便利、又能触一切痛瘡膿水)

という。また唐の甄權の「藥性本草」をひいて、

「又、云う、十香丸を入れて服せば、人をして百毛九竅皆香たらしむ、百病を除き、一切の惡氣、及び驚怖恍惚を治す」

(又云、入十香丸服、令人百毛九竅皆香、除百病、治一切惡氣、

及驚怖恍惚)

とする。また『湯液本草』を著した元の好古の言をあげ、

「諸竅を通じ、經絡を開き、肌骨を透し、酒毒を解し、瓜果食積を消し、中風、中氣、中惡、痰厥、また癥瘕の積聚するを治す」

(通諸竅、開經絡、透肌骨、解酒毒、消瓜果食積、治中風、中氣、中惡、痰厥、積聚癥瘕)

とする。以上あげて来た記述はどちらかというところと靈薬と臨床薬との中間ぐらいのもので、完全な科学的薬剂効果の上に立った判断とはまだいえないようである。しかし晋の『抱朴子』などの理解に比べれば、その薬効の判じ方はずっと身体に忠実であり、生身の体により密着したものとなっている。これもやはり本草学の通らねばならなかった一段階であったといえるであろう。

更に李時珍は、元末の朱震亨『本草衍義補遺』を引いて、

「五臟の風は麝香を用いて以て衛氣を瀉する可からず、口鼻より血出づるは、乃ち陰盛んにして陽虚し、昇る有りて降る無し、當に陽を補い陰を抑すべし、腦、麝、輕揚飛竄の劑を用う可からず、婦人は血を以て主と爲、凡そ血海のごとく虚しくして寒熱汗を盜ずれば、宜しく之を補い養うべし、麝香之散、琥珀の燥を用う可からず」

(五臟之風、不可用麝香以瀉衛氣、口鼻出血、乃陰盛陽虚、有昇無降、當補陽抑陰、不可用腦、麝輕揚飛竄之劑、婦人以血爲主、凡血海虚而寒熱盜汗者、宜補養之、不可用麝香之散、琥珀之燥)とする。この記述は陰陽思想に基づいたもので現代科学の観点から

は些か理解し難い点があるが、しかしこの文は三つの「不可用」からなっている。薬剂の用法に当って否定が用いられるということは、その薬剂の使用範囲が限定されているということであり、使用が限定されているということはその薬剂の効果の範囲がそれだけせばめられ、確固としたものと認識されているということを意味する。それは薬品としての進歩をより明確にあらわすものである。

李時珍はつづいて『用藥法象』をあらわした明の李果の解説をあげ、

「麝香は脾に入りて内病を治す、凡そ風病で骨髓に在る者は宜しく之を用うべし、風邪をして出すを得しむ、若し肌肉に在りて之を用うれば、反って風を引きて骨に入れ、油が麝に入りたるが如く出す能はざるなり」

(麝香入脾治内病、凡風病在骨髓者宜用之、使風邪得出、若在肌肉用之、反引風入骨、如油入麝之不能出也)

とある。ここにはもう、「辟邪殺鬼」などの語はないし陰陽道的な表現も見あたらない。使用上の正負両面に亘ってある一貫した医療観念が働いているのが解る。

『本草綱目』の中で李時珍自身は麝香について次のように述べている。

「嚴氏は風病は必ず先に麝香を用うと言う、一而るに丹溪は、風病、血病は必ず用う可からずと謂う、皆通論に非ず、蓋し麝香は竄を走りて、能く諸竅の利ならざるを通じ、經絡の壅遏を開く、諸風、諸氣、諸血、諸通、驚癇、癥瘕の諸病、經絡の壅閉、孔竅

の利ならざる者の若きは、安んぞ引き導きて以て之を開き、之を通ずせしむる爲に用いざるを得んや、用う可からず非ず、但だ過ぎる可からざるのみ、《濟生方》は、瓜果を食し積を成し、脹を作す者を治すには之を用い、酒を飲み消渴を成す者を治すには之を用う、果は麝を得れば則ち壞れ、酒は麝を得れば則ち敗ると云う、此れ麝の理を用うるを得る者なり」

〔嚴氏言風病必先用麝香、而丹溪謂風病、血病必不可用、皆非通論、蓋麝香走竄、能通諸竅之不利、開經絡之壅遏、若諸風、諸氣、諸血、諸痛、驚癇、癥瘕諸病、經絡壅閉、孔竅不利者、若安不用爲引導以開之、通之耶、非不可用也、但不可過耳、濟生方治食瓜果成積作脹者用之、治飲酒成消渴者用之、云果得麝則壞、酒得麝則敗、此得用麝之理者也〕

李時珍がここに述べている所の、麝香は「能通諸竅之不利」という考え方は、古くは前掲元の好古に已に見える考え方でもある。清の「濟生方」やその後に出版された「本草經疏」、「本草述」、「醫學入門」などに一貫して見られるものであり、これが近代に至るまでの麝香の漢方上の効果とされているものなのである。

七、現代漢方医学に於ける麝香

麝香が如何なる成分からなり、実際に医学上如何なる病状に効くかという点については極めて専門的な課題である為に、門外漢には

中国文献に見える麝香について

徹底理解し得るものではない。それに管見では、麝香のみについて詳説したような単行本も現代中国では出版されていないようである。そこで今手元にある、一九七七年七月、上海科学技術出版社によって刊行された江蘇新医学院編『中薬大辞典』の記述をかいつまんで紹介しておこう。

麝香の成分		
水分	22.56%	(常温、減圧、濃硫酸干燥器中)
灰分	3.62%	(カルシウム(鉀)、ナトリウム(鈉)、カルシウム(鈣)、マグネシウム(鎂)、鉄分、塩素(氣)、流酸基、磷酸基などを含む)
窒素(氮)化合物		
	硝酸アンモニウム(銨)	1.15%
	アンモニウム塩中のアンモニア(氨)	1.89%
	尿素	0.40%
	アンモニア基酸窒素	1.07%
	総窒素量	9.15%
	コレステリン(胆甾醇)	2.19%
	粗纖維	0.59%
	脂肪酸	5.15%
	麝香ケトン(酮 [Muscone])	1.2%
麝香の主要な芳香成分は麝香ケトンであるが、但し又少量の降麝香ケトン(Normuscone)を含んでいる。		

麝香の薬理作用

(1) 中枢作用

天然麝香ケトン(鹽)或は人工麝香ケトンの小剂量はオオシロネズミの食物運動性条件反射に対して顕著な影響を与えない。中等剂量(1kg 中 0.01~0.05mg)は陽性の条件反射の潜伏期間を延長させることが出来るか、或は反応を消失させ、分化相殺させ、別の動物分化を生じさせてそれを受け入れて抑制させることが出来る。大剂量(1kg 中 1mg)は大多数の動物に中毒現象をおこさせ、陽性の条件反射の反応を不規則にするか或は消失させ、分化相殺させて抑制させる。

天然麝香の原生薬、天然麝香ケトン及び人工麝香ケトンはともにアミールパルビタールの引き起すネズミの睡眠時間を短縮させることが出来る。しかし大剂量ならば、反って睡眠時間を延長させる。

天然麝香の 5mg、10mg、20mg の剂量をオオシロネズミに二日、三日、五日と与えれば、顕著にアミールパルビタールの引き起す睡眠時間を短縮させることが出来る。故に麝香の中枢神経系統に対する作用は、少量なら興奮を与え、大量なら抑制を与えることになる。

(2) 呼吸、循環系統に与える影響

麝香は離体心臓に対して興奮作用がある。ウサギ、イヌに麝香を静脈注射すれば、血圧を上昇させ、呼吸数を増加させることが出来る。人工及び天然麝香ケトンを麻酔をかけたネコに静脈注射すれば、

ば、血圧を上昇させる作用があり、呼吸回数を著しく増加させる。ネコの乳頭肌、モグラの気管の平滑肌等を用いて実験すると、麝香にはアカシアフェノールアミンを増強させる作用があることを観察することが出来る。

(3) 子宮に対する作用

麝香は離体及び在位の子宮に対して等しくはっきりとした興奮作用を呈し、後者に対してはとりわけ敏感である。妊娠している子宮は、妊娠していない子宮よりもその反応は敏感であり、妊娠していない子宮に対する興奮作用の発生は比較的緩慢であるが、比較的持続する。

(4) 抗菌、抗炎症作用

麝香の稀液は、試験管内で大腸杆菌、及び金黄色ブドウ球菌を抑制することが出来る。分枝杆菌抗原注射液によって引き起されたオオネズミの関節炎に対して、その消炎作用はプタケトンより強い。

(5) その他の作用

昔は麝香をシャックリ、中枢神経の衰竭によく用いられたが、今はあまり用いられない。しかし人工麝香は小児百日咳のセキ、声門ヘントウセンに用いることが出来る。

以上が大要であるが、専門用語が多く用いられよく理解出来ない点も多い。しかし要するところ、麝香は少量ならば神経を興奮させ大量ならば神経を麻痺(抑制)させること、また血行をよくし、そ

の為心臓の活動を活発にさせ呼吸活動も活発にさせる、という点はその最も大きな特徴といえるであろう。好古や李時珍が言う、「能通諸竅之不利、開經絡之壅遏」は、以上のような点を漢方的に解釈し、しかも可成り適確に言い当てた言葉といえるであろう。

おわりに

中国の医学の歴史は極めて古い。「史記」卷一百五にその伝を見ることが出来る名医扁鵲は戦国時代の人間である。方薬鍼灸に精通し、魏曹操の傷病の手当をした華佗は「後漢書」卷一百十二に伝を持つ。本朝邪馬台国卑弥呼の時代である。還って「論語・子路」に孔子の言葉として「南人有言曰、人而無恆、不可以作巫醫の実態は解りかねるが、恐らく巫覡、醫者が未だ分化せず一体となった職能であったと思われる。現に「説文」は醫字について、「治病工也、或从從巫」といい、醫字のあることを証している。ということは中国の醫は更に古く、孔子の時代、春秋時代に已にその活動を始めていたのである。しかしこうした長い歴史を持つにもかかわらず、中国の醫は陰陽五行思想によってあまりにも参差なく整理され過ぎてしまった為に、対症療法としてはともかく、論理の面では些かいびつで雙解なものになってしまった。現代の中国では中医と西医との間の交流が盛んであるが、その溝にはまだまだ埋め難い点が数多いようである。夏華の地で且て信じられた香の持つ対患治療力が、現代漢方医学でも復権するとはとても思われぬが、しかし香のもと

中国文献に見える麝香について

となった多くの香物は、これからも薬材として大いに使われることになるであろう。

麝香は、現代の我々一般日本人にとって殆んどなじみのないものであるが、案外今後口にするかもしれない漢方薬などには含まれていくかもしれない。そして更に麝香を、香そのものとして、六朝唐の文人がそうしたようにゆったりとした気分で香鑪に焚き、心ゆくまでじっくりと聞き味う機会を是非とも持ちたいものと願うばかりである。

注 ここに参考として、訳出して掲げた「中薬大辞典」の麝香部の「薬理」の条の原文を附しておく。

【薬理】①对中枢的作用 天然麝香酮或人工麝香酮小剂量对大白鼠食物运动性条件反射无显著影响、中等剂量(0.01~0.05毫克/公斤)可使阳性条件反射潜伏期延长或反应消失、分化相改善、有个别动物分化相受到抑制；大剂量时(1毫克/公斤)则使大多数动物呈中毒现象 表现性条件反射的反应不规则或消失、分化相受到抑制。天然麝香原生药、天然麝香酮及人工麝香酮均能缩短戊巴比妥钠引起的小鼠睡眠时间、但大剂量则反而延长睡眠时间、天然麝香五、十、二十毫克的剂予大白鼠二、三和五天者、可显著缩短戊巴比妥钠引起的睡眠时间。故麝香对中枢神经系统的作用为小量兴奋、大量抑制。

②对呼吸、循环系统的影响麝香对离体心脏有兴奋作用、麝香酞静脉注射于家兔及狗、可使血压上升、呼吸次数增加、人工及天然麝香静脉注射于麻醉猫亦均有升压作用、呼吸次数及频率增加。用猫乳头肌、豚鼠气管平滑肌等作实验、可观察到麝香能增强儿茶酚胺的作用。

③对子宫的作用麝香对离体及在位子宫均呈明显兴奋作用、后者更为敏感、妊娠的又较非妊娠的敏感、对非妊娠的兴奋作用发生较慢但较持久。

④抗菌、抗炎作用麝香酞的稀释液、在试管内能抑制大肠杆菌及金黄色

阪南論集 人文・自然科学編 第二十三卷第三号

葡萄球菌。对由分枝杆菌抗原注射液引起的大鼠关节炎作用强于布他酮。
⑤其他作用过去曾将麝香用于呃逆、中枢神经衰竭、现已少用、而人工麝香可用于小儿百日咳的咳嗽及声瘖率。

(一九八七年一〇月五日受理)